

仏教精神に基づく看護とは

京都光華女子大学健康科学部看護学科

荃 津 智 子

ご紹介いただきました荃津と申します。この度は、どうぞよろしくお願いいたします。本日は仏教関係者の方が多くご参加ということで、仏教者の方々を前にお話することはありませんので緊張しております。本日は、仏教看護論、つまり仏教の精神に基づく看護ということについて私なりに日頃考えていることから少しお話をさせていただきますと思います。あわせて看護についても、今一度、看護者の立場から看護とは何かをお伝えできたらと考えております。先ほど早島先生から医療や看護の中では従来、二元論的発想の中で考えられてきたというお話でしたが、現在も二元論的、つまり物質主義的な発想の中に看護学が置かれているのか、ということも含めて少しご紹介できればと思っております。

先程、私が看護学科の学科長という紹介がありました。私自身は三年前に本学に着任いたしました。今年で四年目になります。京都光華女子大学は平成二十三年に看護学科を開設しています。私自身は仏教の理念をもつ大学は初めての勤務ですが、仏教精神に基づく本学において仏教看護論とはどういうことを伝えようとしているのかと、この三年間いろいろ考えてきましたことと、看護学の中で何が伝えられるのかということについてお話ができればと思っております。先ほど前学長の一郷先生からもご紹介がありましたように、本学は仏教精神に基づ

いて教育を展開する中で看護学科の授業科目に「仏教看護論Ⅰ、Ⅱ」をおいています。本日は、あらためて仏教看護論とは何なのか、みなさまと一緒に考えていく機会になればと思っております。

ところで、参考までに看護教育と仏教について歴史的なことについて調べてみました。一八九〇年代日本における看護教育が始まった非常に早い時期に、真宗大谷派、真宗本願寺派のいずれでも看護学校を開設している歴史がありました。新島襄が設立したキリスト教系学校で始めた看護教育に対抗したとも述べられていましたが、仏教界において看護師養成に着目していたことは貴重なことだったといえます。教育は実際には残念ながらそれぞれ十数年から四十年余りで廃止になっています。その後、看護師養成は専門学校での教育が中心となっていました。一九九〇年代以降には大学での教育が増え現在に至っています。現在は看護系大学が二七〇校余りあります。

現在、看護学科を置いている仏教系大学はそれ程多くはありません。その中で「仏教看護論」は存在しているのか、どのような教育を行っているのかということですが、藤腹氏の「仏教看護論」では、科学的看護という言葉で現代の看護を表現し、仏教看護をその二元論的見方とは異なるものとして対比して述べております。また、看護実践について仏教用語を用いて説明を試みています。先ほど早島先生からお話がありましたように、看護学が現在も医学モデルに準拠し二元論的な発想で成り立っているかという点と決してそうではありませんが、この後にご紹介したいと思います。仏教看護だけが、二元論を脱却し看護を述べているわけではない中で、仏教精神に基づく看護とは何なのかについて私自身も考えていきたいと思いますし、皆さま方からのご意見も伺えればと思います。

現在、本学では仏教精神に基づく看護の専門科目として「仏教看護論Ⅰ、Ⅱ」「ターミナルケア」を、仏教者

でもある早島先生、長倉先生、小澤先生が担当されています。仏教看護論Ⅰでは主に生命科学、命の問題、Ⅱでは仏教思想から見た人間とは何か、看護と仏教について、また「ターミナルケア」では、僧侶である長倉先生の臨床でのかわりについて講義が展開されています。残念ながら現在はあまり看護の教員が携わっている部分但至少今後の課題であると私自身は考えております。「仏教精神に基づく看護」について学生にどう伝えていくのか、学生とともに考える教育のあり方がこれから問われていく中で、少し整理をしてお話させていただければと思います。

その前に、看護学はどのような概念で構成され理論化されてきたのか、つまり、人間をどう捉え、また健康や環境についてはどのような捉え、看護とは何をする事なのかについてお話ししたいと思います。

はじめに近代看護の創始者といわれるフロレンス・ナイチンゲールの言葉を紹介したいと思います。

看護がなすべきことは、自然が患者に最も働きやすい状態に患者をおくこと、看護は、自然の回復過程をうまく整えること

ナイチンゲールは、病気を治すということではなく、看護の働きかけによつて環境を変えることが重要である、例えば明るい光、綺麗な空気、清潔な環境……これらが人間の回復力を高めていくのだと述べています。つまり、人間には本来自らを回復させる自然治癒力を備えておりこれらが最大限となるように看護は働きかけるとだと述べているのです。

ナイチンゲールの本質的な言葉を大事にしながらも、看護は、医学との関連が強く初期には医学の影響から医

学モデルをベースとした科学的、二元論的、物質主義的、合理的な考え方の中で共に進んできたプロセスがありました。そのような中、看護理論の発展としては、一九七〇～八〇年代のアメリカで大きなパラダイムシフトが起きています。「従来の物質主義的、科学的、合理的見方や医学モデルからパラダイムシフトし、看護とは何かを問い続けてきた時期」といえます。この頃に理論を発表し、私自身もその考え方に影響を受けたお二人を紹介したいと思います。

マーガレット・ニューマン博士は、次のような言葉で人間や看護を表現しています。やや聞きなれない表現かとは思いますが、

人間と環境の相互作用を通して意識は変化している。この変化、進化は、拡張する意識のプロセスである。

つまり、健康は、「病気である」「病気ではない」ということではなく生きているプロセスそのものであるととらえているのです。人間は必ず自然治癒力を持っており、看護は、それをより高いレベルの意識へと進化させるプロセスを支援するものと述べています。その人自身が気づき、その人らしい生活することを目指しその人とともに歩み支援することが看護であるとしています。私達は、生活の中で時に病気になることもありますが、このような出来事をニューマンは、予測不可能な秩序の乱れを起こす状況と表現し、それに向き合い、次の段階（次元）へと変化することそのものが、健康というプロセスであると述べています。これらの事象に向き合い、次のきっかけ（ターニングポイント）に患者自身が気づくプロセスに看護師自身が寄り添うことが求められ、寄り添い続けることが看護であると述べています。

もう一人は、ジーン・ワトソン博士のケアリング理論に基づく人間、健康、看護に関する言葉です。

人は身体、心、魂の統一体である存在である（人間、健康）。ヒューマン・ケアリング（看護）は、この統一体である人間が統一された調和により（環境）、癒されることを目指す。看護は、信頼に基づく関係性において実践されるが、看護師そのものが環境であることを意識することでケアリングの場となる（環境、看護、自己への気づき）

人間として統一体である存在や環境との関係に目を向け、ケアリングしていくことの意味を理論化しています。看護は見えないもの、測れないものの存在に気づくことが大切である、つまり人間の主観に焦点を当てることも非常に重要であると述べています。

看護においては主観的な経験、つまりその人がどういう経験をしているか、どのような思いや痛み、苦悩があるのかに焦点をあて、人間を理解することへの深い洞察が求められます。昨今では、研究においてもこのような主観に注目した研究についても進んでいます。このように一九八〇年代以降は、看護は医学モデルから離れる形でのパラダイム・シフトがありました。

ここまででは看護とは何かについてお話をしてきましたが、まとめますと、看護は「健康は連続性の中にあり、常に変化するものである」とらえ、また、人間を身体、こころ、魂のすべての統一体であり、変化し続けている存在である」とらえます。その上で看護は、人々が自らの自然治癒力や自らのいのちに対して向き合うことに寄り添い続けることである（ケアリング）」といえます。一言付け加えますと、ケアリングは決して心のありよう

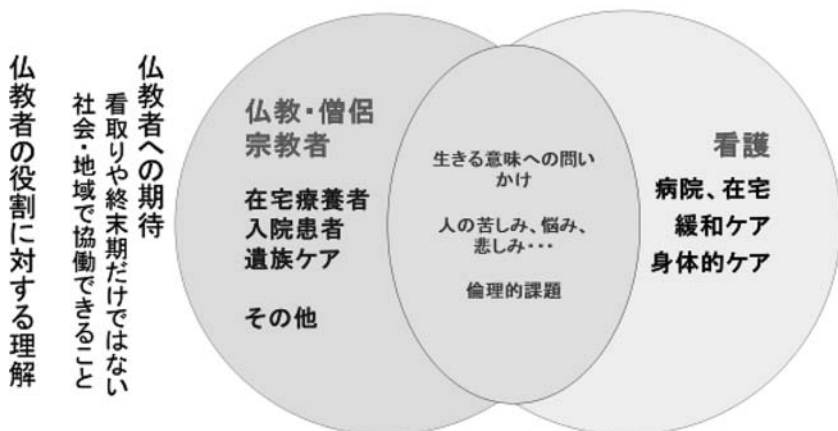
だけを示す言葉でなく、身体のケアも含めて全人的に関わることです。これは、身体の状態は心に影響する、心の状態は身体に影響するということを理解し意識した関わりが常に求められるということです。看護では正確に、安全に、安楽にということは非常に重要なケアの要素になります。つまり採血一つの場面でも、痛みが少なくするような技術はどうすべきなのか、痛みや緊張が患者さんの心にも身体にも様々に影響することを考え、生理学的、医学的な根拠を持って正確に安楽にということが常に私たちに求められるケアといえるのです。

ここから、あらためて仏教精神に基づく看護とは何かということに戻って考えていきたいと思えます。

仏教精神が表す言葉の中には、看護を實踐する私たちに多くのことを示唆する言葉が存在するように思えます。仏教からきている日常的な言葉の中にいくつかの重要な意味を持つものがあります。

「慈悲」、これは慈しむ、大切に思う、感謝、注意を払うということなどの意味を持つとともに、それらについての価値、意味を伝えるものと感じます。これは看護の基本的な姿勢や精神とも共通する言葉だと思えます。「縁」、この時、この場で出会った方（患者さま）と私との出会い、つまりこの時この場で出会ったことの意味、あなた、私がそこに存在することの意味をいはず、今ここにいる人と向き合うことの意味を知ることであり、看護場面の一つひとつの場面や出会いを大切にしていこうと思えます。「菩薩行」、これはある講演で前学長である一郷先生が教育者の姿勢として語られたとき使われた言葉ですが、看護の重要な姿勢であり、ケアリングの本質的な意味を私は伝えていと感じました。菩薩は仏になる修行を続けているものですが、人々が救われるまでは仏にならないと約束し、人々の傍らで見守り続ける者ですね。この寄り添い続けるという姿勢そのものが、看護の本質的な役割を伝えていと感じます。「無常観」「自然観」人も環境もすべて変化し続けている存在、そして、すべてのいのちの営みそのものが変化し続ける存在であることを表しています。さらに「自らを振

看護者と仏教者(宗教者)との協働・協力



仏教者への期待
看取りや終末期だけではなく
社会・地域で協働できること
仏教者の役割に対する理解

り返る(省察)」は、人として私たち一人ひとりが、一人の人であることの意味を問い続けていくことであるといえます。このような看護の姿勢や役割そのものが日常的に使われている仏教精神があらわすものの中に生きてると実感しますし、それらの言葉から看護者としてあり様を考えることができると思います。

ここからは、看護は仏教者とともに何ができるのかということや、看護を少しお話ししたいと思います。

看護と仏教者または宗教者との協力ということでは、先ほど早島先生がおっしゃっていたことと共通する部分もあるのかと思いますが、看護を通して私たちは、病院や在宅での場面で痛みの緩和、身体的な様々なケアを行います。仏教者とともに共通することは、様々な場面での生きる意味の問いかけ、人の苦しみ、悩み、悲しみ、倫理的課題などに関して向き合うことです。これらの問題に向き合うものとして仏教者、僧侶、宗教者などと共に協働することの必要性や意味が大事になってくる時代であると感じています。仏教者、宗教者の方への期待としては話題にされるのが看取りや終末期な

ど死に近いところの話がよく言われますが、私は決して看取りや終末期という場面だけでなく、日々のいのちの営みの中にも仏教者などの宗教者の方たちと一緒に協働したり、助言をもらったりすることの必要性が多いように感じます。そのような意味では臨床だけではなく地域、社会で協働できることがまだまだあるのではないかと思っているところです。私たち医療者にも仏教者、宗教者の役割や期待について、あわせて理解を深めていくことが問われているのではないかと考えております。

今までお話ししてきたことも含めて、仏教は遠いようで近い存在として日常の中にも多くの仏教からきている言葉が存在していることに目を向け、その意味を理解することを通して日本文化における看護学として仏教看護論が存在しているのではないかと思っているところです。繰り返しになりますが、仏教用語からの言葉は、日常的にたくさんありますが、本当の意味で私たちの日々の生活の中に本来の意味を持って根付いているのかどうかということを含めて仏教者の方たちと確認していきながら、日本における看護論とは何かを考えていきたいと思っています。

最後となりますが、これは永観堂の「みかえり阿弥陀さま」を描いたものですが、私はずいぶん前に、初めてこの阿弥陀さまを永観堂で拝見して、振り返る姿の珍さと小さな仏像ですが、その振り返る姿が美しい仏像と感じたのを覚えています。この振り返りの意味については、いくつかの言葉がお堂の中に書かれています。私たちが人としてのあり方を問われているとともに、その言葉には看護の本質的なあり方をも示していると感じたことを紹介して最後の締めとさせていただきます。ありがとうございます。